

## 第6回 信州学び円卓会議

日 時：令和7年12月10日（水）  
15時00分～17時00分  
場 所：長野県教育会館  
(オンライン併用)

### 1 開会

#### ○内山課長

ただいまから、第6回信州学び円卓会議を開会いたします。

委員の皆様におかれましては、年末のお忙しいところ、ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。本日の会議の進行を務めさせていただきます、長野県県民文化部県民の学び支援課長の内山と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

はじめに、本日の出欠状況をご報告させていただきます。軽井沢風越学園校長の岩瀬委員、松本大学教育学部教職支援室専門員の浦野委員、根羽村長の大久保委員、須坂市長の三木委員の4名は、ご都合よりご欠席となっております。それから、NPO法人Hug代表の篠田委員、松川村教育委員会の三輪委員につきましては、オンラインでご参加となっております。

なお、オブザーバーとして、阿部知事、武田教育長に出席いただくこととなっておりますが、知事におかれましては公務の都合により45分程度遅れて到着する見込みとなっておりますので、ご了承ください。

また、会議事項に入る前に、事務局からあらかじめご承知おきいただきたい点について、3点ご説明いたします。

まず1点目ですが、本会議は公開で行うとともに、会議資料、議事録、撮影した写真等について、会議終了後に県ホームページ等へ掲載いたします。

続いて2点目ですが、会議の様子はYouTubeにてライブ配信しておりますとともに、議事録作成等のため、録音させていただいております。

最後に3点目ですが、議論の内容を視覚化するためのグラフィックレコーディングを実施し、会議の終わりに振り返りを行う際に使用いたします。また、完成品につきましては、会議終了後に県ホームページ等へ掲載いたします。

以上、よろしくお願ひいたします。続いて、本日の配布資料はお手元の「配布資料一覧」に記載のとおりでございます。資料1から5、それから参考資料1、2でございますけれども、不足等ありますでしょうか。それでは会議事項に入らせていただきます。ここからの進行は荒井座長、よろしくお願ひいたします。

#### ○荒井座長

信州大学の荒井です。よろしくお願ひいたします。

信州学び円卓会議では、これまで長野県の子どもたちにとって最適な学びの在り方にについてご議論いただくとともに、「学びの『新しい当たり前』を共に創る」というスローガンのもと、当事者意識を持ちアクションを起こしていただくための機運醸成を図ってきました。

具体的には、昨年7月30日に、信州学び円卓会議によるメッセージの発信と、知事及び教育長による共同記者会見が行われ、機運醸成を図ってきました。

今年度は議論のフェーズから実行フェーズへということで、様々な取組が今年度行われてきています。その内容に関して皆様から確認・助言いただき、次の一步を踏み出す場にできればと思っております。

本日の内容は以下の通りです。

1つ目は、運営会議等でご議論いただきました、ともつくミーティングを今年度複数回実施しましたので、その内容を報告させていただきます。

2つ目は、昨年発表しましたメッセージの中に「重点取組項目」がございました。この進捗状況を報告いたしますので、手付かずの部分や、加速すべき点についてご意見をいただきます。

なお、オブザーバーとしてご参加いただいている武田教育長、知事にも議論に加わっていただこうと思います。

それでは会議事項に入ります。

1つ目としまして、ともつくミーティングの報告ということで、事務局から説明をお願いいたします。

## 2 ともつくミーティングの報告について

### ○渡辺係長

信州学び円卓会議運営委員会事務局の渡辺と申します。私の方から信州学び円卓会議ともつくミーティングに関する活動報告をさせていただきます。

お手元に配布しました資料1をご覧ください。

信州学び円卓会議ともつくミーティングは本年度からの新たな取組となりまして、今年度は実行フェーズに移ったことから、様々な主体の連携・協働促進のため、各団体の取組の理解促進の交流の場や、団体間の連携のあり方を探る対話の場として、開催しております。

まず1つ目、教員養成機関（信州大学）と保護者団体（長野県PTA連合会）でございます。

こちらの実施内容につきましては、教員養成機関と保護者団体を繋ぐ場として、信州大学の教員を志す学生と、長野県PTA連合会の皆さんとのともつくミーティングを開催しました。開催目的は、教員と保護者は対立する関係ではなく、子どものためにより良い学校を作っていくパートナーであるということをお互いに理解し、将来的な教員と保護者の良好な関係構築につなげることです。

7月と10月に計3回開催し、参加者からは「保護者は教育の場でのパートナーであるという考え方を知れた」ですとか、「子どものために行動したいという思いは保護者と先生に共通している」といった声があり、相互理解につながったと考えております。教員養成機関と保護者団体のともつくミーティングは、来年2月にも松本大学の協力をいただいて実施する予定でございます。

2つ目は働き方改革についてです。

このテーマのきっかけとして、県教育委員会主催の「子どもの学びをトコトン支える県民の会」にて、学校現場の業務実態に係る意見交換及び教員が行うべき業務について議論されたことを受けて、教育関係者など幅広い県民の皆様にお集まりいただき、学校・教員を支えるために何ができるかを考えていただく場として開催いたしました。

8月と9月に計2回開催し、現役の教員を始め、保護者、学生、市町村教育委員会、県及び市町村議会議員など幅広い方にご参加をいただきました。出された意見の一部を

ご紹介させていただきますと、「『子どもの学びをトコトン支える県民の会』の議論にもあったような、先生が負担に感じている事務が、本当に必要なのか見直すべき」ですか、過剰な要望や要求はしないといった声のほか、学校側におきましても、AIの活用や、民間企業のノウハウを活用するなど、変わるべきがあるといった意見が出され、それに向けて何ができるのか、実際の行動につなげていただけるようグループで話し合い、考えていただきました。

3つ目は、フリースクール・居場所団体と保護者団体の連携です。

こちらは、信州フリースクール居場所等運営者連絡協議会と、長野県PTA連合会の皆さんと一緒にともつくミーティングを開催しました。

フリースクール居場所等運営者連絡協議会はいわゆる不登校の児童生徒の居場所・学びの場を運営されており、また、他方のPTA連合会は主に学校での活動をされていることから、これまで交流がほとんどありませんでした。しかしながら、「一人ひとりの子どもを支える」という根本となる思いは共通していることから、今回はお互いの活動や課題感を知ることで相互理解を深めるとともに、今後、お互いに知恵や力を出し合うことでできうることは何かを考えいただき、今後の協働につなげていただく場として開催いたしました。

主に不登校の子どもについて話し合われ、子どものニーズをまず知る、大人もこれまでの考え方をアップデートする、いくつも選択肢があるということを子どもに伝えるといったことが大事という意見が出され、今後、長野県PTA連合会の研修で不登校のことについて取り上げるですか、PTA連合会の会議に信州フリースクール居場所等運営者連絡協議会の方が参加したり、PTA連合会の方がフリースクールに訪問・視察するといったアイデアが出されました。

最後になりましたが、荒井座長をはじめ各回の開催におきましては、委員の皆様方にもご尽力いただきまして、改めて感謝申し上げます。なお、2ページ以降はグラフィックレコーディングとなっております。こちらは追ってご参照いただければ幸いです。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。

今年度は「つなげる・支える・広げる」という3つのキーワードを軸に「ともつくミーティング」を実施させていただきました。

委員の皆様にもご参加いただきましたので、ぜひご感想、所感等をお願いします。では、畠山委員からお願ひいたします。

#### ○畠山委員

上田市教育委員会の畠山です。私は信州大学松本キャンパスの時にPTAの方、保護者団体と学生と話をしました。

学生との最初のグループワークでは、保護者とどんな関係があるのかということについて、ぼんやりと自分の親が小学校PTAだった時のこととかの話をされていましたが印象的です。そしてとてもPTAも大変だったという話を聞いていました。

また、学校に様々な苦情等があるということについては、まだ完全に理解しているわけではなかったですが、「PTAの方にも入っていただきながら、先生方と一緒に子どもたちのために話をしていくことが大切なんだよ」という話をPTAの方からしていただいて、学生もぼんやりしていたものが少し焦点的になつたかなという印象を持ちました。

○荒井座長

ありがとうございます。では、村松委員、お願ひします。

○村松委員

信州大学教育学部の村松です。私の方は10月15日のPTA連合会様との会に参加させていただきました。

当日は日程の関係もあり学生の参加数はそれほど多くなかったですが、非常に密度の濃いお話をいただいたかと思います。長野県PTA連合会城村会長の非常にインパクトのあるお話を受けて、学生たちの話が広がっていました。

いろいろなお話を聞いて一番感じたのが、学生にとっては教育実習とか先生とのつながりというものがありますが、保護者とこのような形で話をするとか、対保護者とどのようにつながっていけばいいのか等は、大学の授業ではもちろんそのような科目はないですし、機会もないということで、様々な意見交換をされたのですが、このような形で、実際に保護者の方々と教職を目指す学生たちが意見交換をしたり、お互いの思っていることや感じていることを共有する、まさにここでのつなぎ広げる部分というのは改めて大事だと感じました。

マスコミでいろいろな報道があると、保護者対応が大変というようなイメージもあるのですが、こうやっていくことで、どうやって保護者の方が先生を支えてくれるのか、一緒にやっていくのか、そんな視点ができたのではないかと思います。学生と保護者の皆さんとのこういった対話の機会をさらに拡大したり、定期的に行ったりすることが、特に今後の教員を目指す学生たちにとっても、保護者の皆さんにとっても相互にとって良いことなのかなということを感じた次第です。

○荒井座長

ありがとうございます。柳沢委員お願ひします。

○柳沢委員

野沢北高校の柳沢です。7月15日の信州大学松本キャンパスに参加させていただきました。

私のところでは理学部の学生さん、教育学部ではない学生さんたちとのグループワークとなり、その中で出身が長野県内の学生さんもいれば、北海道出身の学生さん等もいましたが、非常に真剣な議論がありました。PTAの方の発表を受けて、ではPTAや保護者とどういう関係を持ったらいいんだろうというテーマで一生懸命議論している姿を見て、まず1つは、とてもアイデアが斬新だという印象でした。

若い人たちはやはり非常に斬新でいいなということを感じると、その一生懸命議論している姿を見たときに、この先こういう人たちに頑張ってもらえるとイメージすると明るい未来が見えてくるなという、学生さんたちを見てそんなことを感じました。

○荒井座長

ありがとうございます。2つ目の働き方改革関係の回に参加された方もいらっしゃいます。いかがでしょうか。竹内委員、お願ひいたします。

○竹内委員

私は8月6日の会に参加させていただきまして、先生方の働き方改革という観点での議論がされました。

ちょうど同じグループに現職の校長先生がいらっしゃって、いろいろと現場の実情を赤裸々にお聞きすることができ参考になりました。

1つ感じましたのは、やはり市町村の教育委員会、教育行政と義務教育小中学校の校長先生方とのコミュニケーションが、やはり大きい自治体になればなるほど仕方ない部分もあるかというんですが、やはり距離感や信頼関係だったり、現場側は様々なアイデアをお持ちで、いろんなことをやりたいと思っていらっしゃる反面、なかなかそれを地元の教育委員会にうまく言えないジレンマといいますか、悩ましさみたいなものも吐露されていたのは少し印象的でした。

○荒井座長

ありがとうございました。他にはいかがでしょうか。

2番目の方に参加していただいた方の属性という点では、学校関係者にとどまらないといいますか、民間の方のご参加もありましたし、学校関係者の中でも、学校事務職員の方々も数多く参加していただいているというのは、とても喜ばしいことであったなと感じているところであります。

3つ目のフリースクール・居場所団体と保護者団体とのともつくミーティングに参加された篠田委員、お声出し可能でしょうか。

○篠田委員

本当に最近だったんですけど、PTAの団体の方や教職員の方もいましたし、一般参加の方もいたんですけども、ミーティングに参加させていただきました。

私は8月6日の方も参加させてもらっていて、そちらは先生たちがグループの中に多く、私が委員をさせてもらってからの2年間で大きく動いていると思うのは、私たちのような民間団体が、先生たち、教職員の方、PTAの方たちと一緒に対話をしたり研修をさせてもらうという機会がグッと増えましたので、私たち自身がやはり学校も大変なんだなとか、保護者の方がどんなことを考えているのかなとかを知ることはとてもいい機会でした。

特にPTAのこの前の会は、私たちフリースクール団体は特に日頃接するのは、不登校に關係した保護者やお子さん、いわゆる当事者の家庭ばかりなんですけれども、今回初めてぐらい、非当事者というか不登校を経験していない保護者の方と対話をするということも、グループの中で多くあり、不登校に対するイメージや今までの思いというものを共有させてもらうことができ、とても大きな機会だったと思います。

PTAの方とも、最終的にはやはり100を目指さない、一緒に作っていくという当事者意識が大事だねということになり、とても良い回でしたが、まだまだフリースクール自身には利用料の問題や入試の問題、学校との連携の問題等いろいろあるので、そういうところが様々なところと対話をしてお互いを知るというところから始まるんだということが本当に勉強になりました。

○荒井座長

ありがとうございました。他にはいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

本年度は「つなげる・支える・広げる」というキーワードで様々な方々と1つのテーマで混ぜ合いながら議論をしていくという実践を積み重ねてきたところであります。

では次の項目にいきます。重点取組項目の状況についてということで、昨年公表させていただきました重点取組項目の進捗を共有させていただきます。

では、事務局から説明をお願いします。

### 3 重点取組項目の状況について

#### ・県教育委員会の主な取組状況について

##### ○矢島補佐

事務局の矢島でございます。重点取組項目の状況についてご説明いたします。資料2「『信州学び円卓会議』重点取組項目の状況について」をご覧ください。

信州学び円卓会議から昨年7月に発表したメッセージの6つの重点取組項目ごとに、昨年までの円卓会議の場で議論として出されておりました「現状と課題」、「取組の方向性」をまとめさせていただき、それに対応したかたちで「令和7年度関連事業・取組」を記載させていただきました。

なお、資料3「令和7年度「信州学び円卓会議」重点取組項目関連事業・取組一覧」は、資料2の「令和7年度関連事業・取組」の欄と結びついております。

それでは、重点取組項目ごとに説明させていただきます。

最初に、「① 子どもたちが学校等でやりたいことを支える」です。

「現状と課題」として、「子どもたちが主体的・対話的に学ぶことができる環境が整備されていない」と課題として出され、「取組の方向性」として、「子どもの興味・関心や学習進度に応じた学習者中心の学びの推進」や、「安心安全で自分のやってみたいを受け止めてもらえる環境づくり」が掲げられています。「令和7年度関連事業」は、後ほど資料4でもご説明がございますが、教育委員会において、「ウェルビーイング実践校 TOCO-TON の実施」により取組んでいるところです。

次に、「② 教員が学校等でチャレンジしたいことを支える」です。

「現状・課題」として、「事務量の多さと多忙感により時間的・精神的な余裕がなく、余白がない」と現状として出され、「取組の方向性」として、「教員配置の充実や外部人材の活用」や「教員業務支援員の拡充」が掲げられております。「令和7年度関連事業」では、教育委員会の「欠員対策、産育休代替のための教員配置」や、「教員業務支援員配置」、「授業の質向上と働き方改革のための教員配置」といった取組が進められています。

次に、「③一人ひとりの学びや得意を共に認め合う仕組みを検討する」です。

「現状・課題」として、「子どもが抱える困難の多様化・複雑化に対する理解が進んでない」と課題として出され、「取組の方向性」として、「『学校外にも豊かな学びの場がある』『学校に行けなくても大丈夫』という価値観の啓発」が掲げられています。

「令和7年度関連事業」では、県民文化部の「信州型フリースクールの運営支援」により取組んでいるところです。

次に、「④ 長野県の中山間地域の強みを活かした特色ある学びを広げる」です。

「現状・課題」として、「人口減少社会における学びの場の確保や質の維持・向上のあり方の検討が急務となっている」と出され、「取組の方向性」として、「ICTを活用

した遠隔学習」が図られております。「令和7年度関連事業」では、教育委員会の「中山間地をつなぐオンライン授業支援」により取組んでいるところでございます。

次に、「⑤『こどもまんなか社会』の実現に向けた様々な機関の連携・協働を進める」です。

「現状・課題」として、「学校と学校外の関係者の対話の場・機会が不足している」と出されておりました。「取組の方向性」として、「学校・学校外、公立・私立の対話・連携、相互交流、学び合いの推進、情報・ノウハウの共有」が掲げられており、

「令和7年度関連事業」では、先ほどご説明いたしました「『信州学び円卓会議』とともにミーティング」や教育委員会の「子どもの学びをトコトン支える県民の会」により取組んでいるところでございます。

最後に、「⑥多様な学びの場を信州全体で支えるネットワークを再構築する」です。

「現状と課題」として、「子どもの困難の多様化・複雑化に対する理解が進んでいない」や、「学校だけに責任を追及しない社会の寛容さが醸成されていない」と出され、

「取組の方向性」として、「教育行政の広域化」や「地域・社会資源の充実、積極的な活用」が掲げられ、「令和7年度関連事業」として、「信州学び円卓会議フォーラムの開催」や「木曽地域広域連携推進会議学びの場環境整備部会での検討」などにより取組んでいるところでございます。

なお、資料3につきましては、令和7年度関連事業（取組）の概要を記載したものになりますので説明は省略させていただきます。事務局からの説明は以上となります。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。

続きまして、教育委員会からも進捗状況を報告いただけるということで、教育長からお願ひいたします。

#### ○武田教育長

資料4の2ページ、「ウェルビーイング実践校 TOCO-TON の状況」です。

本年度から12市町村70校を「ウェルビーイング実践校 TOCO-TON」に指定して、今年はその準備、来年の4月から実装していくということですけども、この「ウェルビーイング実践校 TOCO-TON」は、2つの大きなミッションがあります。

1つは子ども側から学校の仕組みを見直していくということです。学校は子どもにとって楽しい場所になっているのか、学ぶことは楽しいことになっているのか、ともすると大人側、教師側の都合や理屈になっていないかということです。

もう1つは、学校は子どもと保護者と地域の皆さんと一緒につくっていくものだということ。

この2つを実践していくが、中身についてはそれぞれの学校や市町村で考えていくということです。

右側に長野県の地図がございますが、TOCO-TONに指定されている市町村を赤く塗っております。後ほど説明いたしますけれども、来年度さらに新しく指定しておりますので、この地図はもう少し赤くなります。

3ページをご覧ください。

それに伴って長野県教育委員会自体も変わっていく必要があると考えております。その1つとして、「学校改革支援センター」をつくりました。ともすると教育委員会というのは、学校を指導するということが多かったようなところがありますが、指導をやめ

て学校と一緒につくっていく。つまり伴走に変えていくというのが、この学校改革支援センターの一番の狙い、マインドです。4月11日に学校改革支援センターの発足式があり、知事にも参加していただいて、共に新しい当たり前を創っていくという1つの取り組みでございます。

TOCO-TONと学校改革支援センターの関係ですけども、TOCO-TONに指定している市町村教育委員会に、加配の教員を指導主事として配置しております。今まででは、加配の教員は学校の現場に置かれることが多く、学校の中で埋もれていくことが起きがちでしたが、市町村教育委員会に置くことによって、学校改革支援センターのミッションが、よりやりやすいというような声も聞いています。

学校改革支援センターのミッションを3つ示してありますけれども、どうしても学校を変えることは学校だけでは難しい、というところがありますので、県教育委員会も一緒になって学校改革に取組んでいこうということあります。実際、TOCO-TONの学校がどのような実践を考え、今年どんなことを行ってきたかということにつきまして、学校改革支援センター長から説明をさせてもらいます。

#### ○小池参事

学校改革支援センターの小池でございます。私の方から具体的な取組について紹介をさせていただきます。

4ページ、今年度ウェルビーイング実践校では、それぞれの地域、学校の課題を解決して乗り越えていくために仕組み改革に取組んでいるわけですけれども、整理するところにある7つの取組が行われているというようになっております。

5ページです。多くの学校で子どもたちが学校のルールや行事のあり方を考えて、学校づくりに参画するといった取組が進んできております。この写真は中野市の日野小学校ですけれども、日野小学校では5月に行われる運動会で、子どもたちが自分たちでアイデアを出して開閉会式を実施いたしました。その経験を生かして、ここではこの後行われる音楽会をどのようにしていくのかということを、1年生から6年生まで異年齢のグループで話し合いをしている様子です。

6年生が下級生に配慮しながら意見をもらったり、いろいろ進められていく中で、元気いっぱいに歌えたりとか、校長先生に仮装して盛り上げてほしいとか、そういういろいろなアイデアが出されておりました。

次に6ページです。信州やまほいくと小学校の接続に取り組む市町村もあります。この写真は栄村の1年生の様子ですけれども、裏山に秘密基地を作ろうと活動をしている様子です。森の中に倒れた2本の木が恐竜の口を開けたように見えるということで、子どもたちは丸太をのこぎりで切って、目を描いたりというようなことをしています。この写真は、枝を使って恐竜の歯を磨いているところです。

先生方は子どもたちの姿を見守りながら、こう並ぼうとか急ごうとか、声をついかけがちなんですけれども、そういった声をかけずに、また「～しよう」というようなことも言わないで、子どもたちを見守りながら一緒にしているという様子があります。

次の7ページは中学校の様子です。飯田市では教育課程特例校の申請をいたしまして、令和8年度から新設教科として「みらい創造科」というものを予定しております。こちらは高陵中学校の総合的な学習の時間の様子ですけれども、自分が追求したいことを決めて取組んでおります。この生徒たちは、外来種生物について追求をしているというところで、市役所の方と一緒に取組をしています。地域の方や高校生など外部講師を招いて、対話をしながら自分の問い合わせを設定しているというように活動しています。

この日はその問い合わせを解決するために外に出て実際に活動しているところですが、みらい創造科を通して子どもたちの学びがどのように展開されていくか、今後注目していきたいと思っております。

8ページですが、一斉一律を脱した様々な学びの形が取り組まれているということです、この写真は松本市の安曇小学校、奈川小学校、大野川小学校の様子です。この3校、学校や学年の枠を超えていろいろな取組をしていますが、行事だけではなく教科学習も取組んでおります。この写真は3校の1、2年生が体育の授業を一緒に行っているところです。普段は各校の人数が非常に少なく活動に限りがありますが、人数が増えて活気のある中で取組んでいます。

異年齢の学びを通して、「いろんな人の話を聞くことができて楽しい」という子どもの声も聞こえております。また保護者の方からも、「ここでしかできない学びができる」というような声も聞かれているということあります。

9ページ、地域の方と一緒に学校づくりを進めている様子であります。平谷小学校ですけれども、「平谷未来カフェ」という形で、小学生と教員、保護者、地域の方が、地域の学校の未来について対話をしています。実際にここで出された提案を学校づくりに反映しております、「休み時間を長くしてほしい」とか、「一斉一律の宿題をなくして、一人ひとりが自分に合った課題に取り組めるような方法にしてほしい」というようなことに早速取組んでいるということです。

さらに、一旦変えたらそのままということではなく、子どもの声を受けて定期的に見直しをしていくという取組を進めているそうです。

10ページ、こういった様子はインスタグラムやフェイスブックで紹介をしておりますので、ご覧いただければと思います。

11ページ、先ほど教育長からありましたけれども、こういった学校改革の取組を一層加速するために、実践校 TOCO-TON の第2期校として12市町村 74校を新たに指定させていただいております。新たに指定したところが赤くなっているところです。

12ページ、第2期の指定校については、これまでの実践校で取組んだ学校の仕組み改革だけでなく、学校や教室に行きづらい子どもも一緒に学ぶという仕組み改革を加えて、取組を進めていただこうと考えております。東信地区については、佐久市と南佐久の小海町、北相木村、南相木村の学校を指定しております。

13ページ、南信地区の学校が載っておりますけれども、茅野市、伊那市、飯島町の学校と、松本市については松島中学校を単独で指定しております。

14ページ、中信地区の大町市八坂小中学校、筑北村、松川村を、そして、北信地区では飯山市を指定しております。

15ページに新たな指定を加えた23市町村 144校を地図として記載しております。先ほどの地図はこのような形で少し広がっているかと思います。新たな指定校を加えて、新しい学びの当たり前を創るために学校改革支援センターとしても支援を続けてまいりたいと思っております。続けて教育長からお願ひします。

## ○武田教育長

16ページをお願いいたします。先ほど少し紹介がありましたけれども、「子どもの学びをトコトン支える県民の会」という会議を行いました。一番の目的は、「子どもの学びをトコトン支える」ということですけど、まずそのためには先生たちにもう少し学校生活にゆとりがって、今多忙を極めている先生たちをもう少し自由にしていく必要があるということで、これは学校だけではなかなかできないで多くの方々に集っていた

だいて、先生たちが子どもと向き合えるように応援するという趣旨で始めたものでございます。

今回は、先生方の負担感の要因の1つに保護者対応があり、保護者の皆様には、先生たちの過度なストレスにならないような対応をお願いしたいということで、長野県と長野県教育委員会、そして「子どもの学びをトコトン支える県民の会」の三者で、16ページ右側にあるようなポスターを作成し、全ての学校に配布しました。こういったポスターがあつたことで効果も出ているという報告も聞いているところです。

17ページです。これに合わせてPTAの皆様もポスターを独自に作っていただいたようで、それをPTAの立場から各学校にお渡ししているという話を聞いております。

18ページは、様々な立場の方が集まって学校の先生方をバックアップしていこうという動きがTOCO-TONの指定先でもある箕輪町で行われました。私どもとすると県で行っている、様々な立場の人が集まって、学校の先生たちの力になろうという動きがいろんな現場で起こっていくことが一番力になるのかなと思っております。

最後の19ページ、市町村教委を伴走支援するということで、文部科学省の働き方改革実証事業に参加いたしまして、市町村教委と県教委、外部有識者が共に働き方改革に取組んでいます。3市1村、長野市、松本市、塩尻市と南箕輪村で取組んでいるところであります。

取組状況について説明してまいりましたが、上手くいっているところと上手くいっていないところとあります。一番課題に感じているところは、やはり先生たちのマインドチェンジです。内的には新しいことに取組むことを負担に感じるということ。また、新しいことをやるために古いことをやめていかなきゃいけないんですけど、やめることへの抵抗感ということがあります。

それからもう1つ、長野県の教師にありがちなんですが、「楽しむ」という文化ではないんですね。何かをやることを楽しんでやるというより、逆にちょっと変な悲壮感みたいなことで取組む傾向があります。

ただ、このマインドチェンジは内的なことだけではなく外的なこともある。例えば、宿題を出さなくなったら、保護者から「宿題を出してくれ」、あるいは自由進度学習のようなことをやっていると「ちゃんと先生が教える授業をやってくれ」と。あるいは地域の方々も、例えば自由進度学習のような授業を見た時に「このクラスは学級崩壊しているんじゃないかな」と。そんな見方もあるなかで先生たちがこうした取組に進みにくいという現状もある点が課題になります。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。事務局と県教育委員会から、本年度を中心とした取組をご紹介いただきました。

TOCO-TONに関しては、2つの視点、学習者、つまり子どもの視点で捉えていくことと、共に創る、共創視点ですね、地域の方、保護者の方とともに、新たな学校づくりを推進していくという観点が重要かと思います。

#### 【知事到着】

#### 4 意見交換

##### ○荒井座長

では後半の意見交換に入ります。資料2、3に目配せいただけたらと思いますが、昨年7月に取りまとめました重点取組項目に対する取り組みが、右側の令和7年度関連事業に記載しています。

皆様それぞれのお立場からご意見をいただき、次年度より加速させていくべきといった観点からご意見等をいただきたいと思っております。いかがでしょうか。

##### ○大日方委員

信濃教育会の大日方でございます。私どもといたしましては「②教員が学校等でチャレンジしたいことを支える」についてお話をさせていただければと思います。

私どもの事業の中に、先生方がいろいろな授業を公開し、それを学び合うという事業があります。今までですと、負担感があつたり、与えられる研究に先生たちがなかなか主体的に関わっていけない部分もあつたりしたわけですけれども、その課題を解決するために立候補制にして4年ぐらい経ちます。しかし、どうも以前のイメージがまだ払拭できていないところがあるということで、本年度は名称を「学び創造研究会」に変更いたしました。

より自由で、より主体的に、先生方のやりたい研究を存分にやり、授業を公開していただきたいという願いがあります。本年度は24の学校、個人で授業公開をしていただいたところでございます。自由進度学習に挑戦した学校とか、探究的な学習、あるいは教育課程特例校に挑戦した学校等があったわけでございますけれども、我々とすればそれなりに成果を感じており、次年度につなげていきたいと思っているところです。

先ほどTOCO-TONの発表がありましたが、「来年度、信教の『学び創造研究会』に参加したいけれど、TOCO-TONの方に手を挙げたいから、来年度うちの学校は遠慮するよ」という学校もあり、TOCO-TONの魅力にちょっと押され気味なところがあります。私共としましては、差別化を図り、県教委のTOCO-TONとは違う実践研究ができるということをアピールしながら、今年度以上に先生方の主体的な挑戦を支えていきたいと思っているところでございます。

##### ○荒井座長

ありがとうございました。差別化という点では、「学び創造研究会」は個人でアプローチできるというところが1つポイントでしょうか。

##### ○大日方委員

そうです。

##### ○荒井座長

ありがとうございます。では他の委員の皆さん、いかがでしょうか。

竹内委員お願いします。

##### ○竹内委員

ただ今、細かくご説明いただきました重点取組項目と関連する事業について率直な感想として、昨年7月にメッセージを出していただいて以降、わずか1年の中でこれだけ

の関連事業を県と県教育委員会が連携をされて、立ち上げつつ形にされているということに、大変心強いとまず思うのと、県や県教育委員会の覚悟、本気度を改めて感じさせていただきました。

そういう中で6つの重点取組項目のそれぞれの事業について、さらにしっかりと成果を上げていくという点で、私はこの円卓会議に参加させていただいた当初からずっと自分自身のテーマ、課題として考えている高校入試のことについて、少し意見を述べさせていただきたいと思っています。

資料3で言いますと、重点取組項目③「一人ひとりの学びや得意を共に認め合う仕組みを検討する」が挙げられまして、資料2の「取組の方向性」というところには、「自分の強みや得意な分野を活かしてチャレンジできる入試制度の検討」と明記されているわけです。この入試制度というのは非常に大きなテーマで、国の法律も関係しますし、県だけでなく、市町村教育委員会含め全県で議論をする必要性があるというのは十分承知しているんですが、以前から、高校入試の様々なネガティブな側面が現場から指摘されていると思っています。

今回の関連事業をしっかりと進める上では、物理的にも心理的にも抑制的に機能している部分を高校入試から極力排除していく必要性があると感じています。重点取組項目でも③で高校入試ということを考えているわけですけれども、重点項目①②④の部分にも関わってくるということで、少し一般的な観点から発言させていただきたいと思うんですけれども、まず、国の2030年次期学習指導要領にいろいろ論点整理をされている内容などを見ると、やはり高校入試の従来のあり方を抜本的に見直すべきだということは、かなり強調されていると感じています。

そういう中で端的に申し上げますと、現行の全県の県立高校が共通して実施している学力テストというのは、私としては廃止すべきではないかと思っています。

そもそもこれは入学者の選抜試験ということで、選抜するということが元々の趣旨であります。少子化がどんどん進む中で定員割れしている高校も増えているということで、選ばれるのは子どもの方というよりもむしろ高校側というのが実態になりつつあるんじゃないかなと思います。国の議論の中でもスクールポリシーの明確化ということが言われていますし、今回の重点取組項目の中での議論も、やはり高校の魅力化ということが県教育委員会でも強調されているかと思います。

県立高校の魅力化、個性化、特色化ということをしっかりと可視化し、各校発信していくことによって中学校側が一人ひとりの子どもの興味関心に沿って高校を選ぶ。学生側が行きたい高校をきちんと選べる仕組みを作っていく必要があるのではないかと思います。

実際に国でも議論されていますが、「マッチング」という考え方を私としては取り入れる必要があるのではないかと思っています。今申し上げたように、各高校のスクールポリシー、スクールミッション等を明確に発信する中で、例えば高校と中学校でいろいろ交流をしたり、中学生が高校の授業に参加したりしながら、中学3年間ゆっくり時間をかけて自分が行きたい進路を選択する、行きたい高校を選ぶとか。

ですので、従来のような輪切り、偏差値によって振り分けられるというようなことは、極めて時代に即してないですし、結果として不本意入学を生み出す背景になっているんじゃないかなということも危惧します。不本意入学というのは、仮の言い方として

「必ずしも偏差値が高くない高校」だけではなく、むしろ偏差値の高い高校にも生じる傾向があるのではないかと思っています。

具体的に言いますと、例えば中学校の進路指導の先生が、進学校と言われる高校になんとか入れるよう努力されて、子どもたちを励ますわけですけれども、現実問題として、例えば320人の定員では1番から320番まで順位付けされてしましますので、中学校の時にトップクラスでも、高校に入ったらビリになるという中で、進学校の中で不登校となる。そういう状況をしっかり見る必要があるかなと思っています。

この結果として転校とか退学ということにもつながると思うんですが、これは私の1つの仮説ですけれども、進学校においてはなかなか退学できない、させてもらえないというケースもあるのではないかと思っています。そうすると、結局不登校状態になるということがあり得るんですが、不登校になってしまって学校を辞めることができない、辞めさせてもらえないというような状態になると、これは全く私の仮説ですけれども、長野県において10代の自死というのは古くから非常に問題視されているわけですけれども、高校入試が不本意入学につながるとすれば、10代の自死の背景に1つになっている可能性がゼロではないのではないかと感じています。

ですので、まず私としては共通の学力テストによる高校入試は廃止すべきで、合わせて今、調査書や内申書のことも議論されていると思いますけれども、これについても、点数による評定よりもむしろ学びの履歴としてのポートフォリオ的なものをやる方がいいかななど感じるところです。

先ほど申し上げましたように、これから高校入試のあり方、高校への進学は、どれだけ学生と高校との相思相愛を生み出すか、というマッチングの仕組みを考える必要があるかなと思っています。

聞きようによつては乱暴な話に思われたかと思いますが、冒頭に申し上げましたように、これはすでに国では議論が進んでいますので、いよいよ正面から向き合うタイミングかなと思いますし、2030年が次の学習指導要領のスタートになりますけれども、そこまで5年弱ということで、スケジュールとしては2030年までに高校入試のあり方に具体的な道筋をつけるということが、やはりその次に進むためには1つのメリットかなと思っていますので、ちょっと唐突な話に聞こえるかもしれません、私としては当初から高校入試については非常に問題というか課題として感じていたものですから、今回一步踏み込んでお話をさせていただきました。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。資料2「③一人ひとりの学びや得意を共に認め合う仕組みを検討する」部分で、取組の方向性として、「自分の強みや得意な分野を活かしてチャレンジできる入試制度の検討」等と記載があります。

確かに、この部分に関してのフォローアップが手つかずであるということは認めざる得ない状況です。心からお詫び申し上げたいと思っています。

何のための入試なのか、入試は選抜としての仕組みであるわけですけれども、様々な選択肢がありうると思います。

③の部分に関して、もし他の委員の皆さんもご意見等あればと思いますが、皆さんいかがでしょうか。

篠田委員、お願いします。

#### ○篠田委員

竹内委員の意見に少し違う角度からお話しをもらいたいんですけど、フリースクールや居場所等を運営していると、学校以外の学びを選択している子どもたちが、中学

生になってぶつかる壁の1つとして、「高校からは頑張りたい」とか「自分を変えたい、新しい生活にチャレンジしたい」とか「新しい人間関係でもう1回頑張りたい」という子が多い中で、自分の強みや得意、例えばフリースクール・居場所で培った得意な力、他者や社会とのつながり、経験を活かして、どれだけの子が気持ちをリセットして高校入試に前向きにチャレンジできているんだろうと思った時に、かなり難しい状況があるということを関わる身として感じています。

評定もなく学校にも行っていないという部分で、子どもたちは半分絶望している中で、どういう選択肢を取るかというと、理解のありそうな私立高校を選ぶんですよね。そうすると結局、公立高校はそういう子たちにとっては選べない、Cannotの世界になってしまふという点は、それが果たして本当に一人ひとりの学びや得意を認め合うような仕組み・制度であるのかというところを日々疑問に感じています。

どんな子でも、例えば学校以外の学びを選択して中学校3年間を終えたとしても、新しい気持ちで高校生活が頑張れるような仕組みや制度が公立高校でも整っていくといいというのは1つ思います。

もう1つ、中学校校内教育支援センターに関してですが、今は「学校行かなくてもいいよ」とか「フリースクール・居場所もあるよ、そこでも学校は出席扱いになるよ」ということはかなり機運醸成としては高まっていると思うんですけど、同時に、教育支援センターからするとやはり「学校に来てね、少しでも多くいてね」「こっちの時間を長くしてね」など、教育支援センターの方になんとか引っ張ろうとする先生たちの価値観や教育委員会の価値観というのも正直あると思っています。

なので、教育支援センターが子どもによってはかなり行きづらい場所、安心して過ごせないような空気を感じてしまうことが往々にして、特に不登校の子たちは多いのかと思いますので、支援員の配置補助もどれほど実際効果があるのかということはお聞きしてみたいですが、合わせて教育支援センターの目指す方向性、教育支援センターでどんな子どもたちをどのように受け入れて、学校や地域と連携しながら、学びとして確保していく、居場所として確立していくのかというところが疑問に思うこともあるので、円卓会議や他の対話の場を通して、いろんな方とお話ししてみたいと感じています。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。篠田委員からはご自身のフィールドから不登校のお子さんに対する入試制度の部分、また資料2の末尾にあります、いわゆる教育支援センターですね、校内教育支援センターと校外教育支援センターがありますけれども、それぞれの役割規定についてご発言いただきました。長野県では「中間教室」と呼ばれていたわけですけれども、そこでどのような支援あるいは教育をそこで施すのかということについては、地域ごと学校ごとにかなり違いがあるということで、ここも大きな論点です。ありがとうございます。

次に竹内委員、お願ひします。

#### ○竹内委員

先ほどの私の発言で1つ重要なことを落としてしまったのですが、今、国の議論の中でも入試改革のためには学びの質の向上が必須条件だということも言われています。

また、篠田委員のお話につながると思いますが、多様な子どもたちの可能性を十分に評価できていないのではないかということが問題視されています。

私は義務教育、町の立場から、またこの円卓会議や関係の会議でも、現職の校長先生からよく発言ありましたけど、「様々なこと、新しいことにチャレンジしたいけど、高校入試があるので」という言葉がいつも少し引っかかっていました。

義務教育は6、3の9年間です。10代の大事な9年間を本当に十分に使い切ることは申し上げるまでもないと思いますけれども、中学校2年生ぐらいから高校入試を子どもも先生も学校全体として意識せざるを得ない。それはそれで必要だからやっているわけですけれども、高校入試というものが、今、少子化の中で一人ひとりの能力をしっかりと伸ばしていくかなくてはいけないという、これから社会像が見えていく中で、果たしてほぼ点数だけで決まってしまう入試というものが、本当に義務教育期間の学びの質の向上にプラスになっているのかということをしっかりと議論する必要がありますし、それこそTOCO-TONのような新しい取組の成果をより上げるために、高校入試のあり方というのは非常に関連してくると思います。

先ほど申し上げたように、高校側、特に中山間地の地域校など、また都市部の専門校は多様な学生を取り入れてこそ、存在価値が出てくるだろうと思いますので、そのような高校側のメリットも含めて考えて、長野県からぜひ新しい入試の仕組みを考案できたらということは切に願うところです。

○荒井座長

ありがとうございました。③の部分について他の方いかがでしょうか。  
畠山委員お願いします。

○畠山委員

3年前にこの会議が始まった時、子どもたちの「やってみたい」を受け止めて、そういう学びの学校を作るといった時に、その頃私は中学現場にいたんですけど、先ほど竹内委員がおっしゃられたとおり感じていたのは、やはり高校入試と言われると、自分が学校現場にいた時も、例えば水曜日に清掃をやらず25分間、自分たちで学びたいものをやるというような時間を作っていましたが、どうしても先生方の時間の使い方としては、基礎学習などの学習、特に3年生になり入試が近づいてくると、朝読書も基礎学習の時間に使っている。

そうなるということは、やはり高校入試が得点を取るということが主になってくるということと、当然、教科書ばかりが教える内容ということではないですが、教科書を終わらせるということに意識が向いている先生がいるということは、今までの高校入試の制度からいくと仕方がないことかなと思います。

高校の方は今、それぞれの学校で4つの特色を打ち出してきているということで、特に探究について高校の方がクローズアップされている中で、中学校が少し遅れているという印象があります。自分が現場において、どのようにしていいかということがわからずには、私は終わってしまったんですけども、高校入試も含めた中学校の学びについて、少し重点的にできるといいと思います。

学校の教員の研修体制についても、少しづつ県に変えてきていただいているということもあり、ちょうどいい機会であるので、今まで決められた枠の中での研修だったわけですけども、子どもたちの「やってみたい」を大事にする先生方の意識づくりの研修をしてみたり、「自分はこういうことをやってみたい」ということを皆で議論するとか、実践を持ち寄る等の研修をそれぞれの市町村ごとできるといいかなと感じています。

○荒井座長

ありがとうございました。今、入試制度関連の発言が多いですけれども、他には、この分野に関してよろしいですか。

三輪委員、お願ひいたします。

○三輪委員

入試ではないですが、高校のことに関わってお話できればと思います。

④「長野県の中山間地域の強みを活かした特色ある学びを広げる」にも関わってくるかと思いますが、オンライン授業のことが④「中山間地をつなぐオンライン授業支援」ということで上がってきています。この重点取組項目の関連授業の中には、中山間地域の児童生徒が多様な意見に触れたり、とあります。

この生徒の中に高校生も入っているのかと思いながら見ていますが、もしタブレットが小中学生向けのみだとしたら、もう少し展開をしてもいいのかなという立場で意見を言わせていただきます。

私自身はこのオンライン授業、学年が上がれば上がるほど効果的な授業になるのではないかと考えています。

小学校の特に低学年は、直接体験による発見や感じることが非常に原体験として大切で、そこに学び、知識がさらに乗ってきて深まり、探究になっていくというような成長と学びの過程をイメージしていますので、中学校の後半や高校生になって、オンラインで広域につながっていくことも非常に効果的な活用になってくると思います。

そうしたときに高校の授業の中でオンラインを進めているようなところが県内にはあるのかとか、あるいは国内はどうなのかと思いまして、ネットで検索をしてみたら、北海道などではオンラインの授業を研究している高校があるということを見つけて、高校でもやっているところがあるんだなと思うと、まだまだ長野県は取組が遅れている方なのかなと思った次第です。

ただ、長野県も非常に少子化も進んでいますし、今、高校も少子化に伴って生徒も減っています。統合の話も進んでいます。そうなりますと、今後、先生方もどんどん減ってくることは考えられます。先生方が減ると、必履修科目のみの授業となり、多様な授業の展開も難しくなってくるんじゃないかなと考えています。

それを生徒の側から考えてみると、授業が限られてきている学校というものが、魅力があるのかと思うわけです。人数が少ない中で、友達や人間関係にも多様なものを求められるのか、あるいは授業の中でも、いろんな方や友達の考え方、多様な考え方触れられるのかとか、楽しさはどうなのかとか、そういう出会いとか機会が減っていくんじゃないかなと思います。そうすると、そのような高校は魅力を感じられなくなつて、子どもたちがどんどん離れていってしまうんじゃないかなと思っています。

ですので、学びの機会を保障するということで、先ほど篠田委員からもお話しがあったように、中学まで学校に行きにくかったお子さんたちも、もしオンライン授業が高校にも入ってくると、少し心が軽くなつて、行ってみようかなということも思うのではないかと考えたときに、高校でのオンラインの授業の導入も、公立についてもさらに検討していく必要があるんじゃないかなと思います。

例えば教科学習も、学校や外部の教育機関等々でもオンライン配信をして、統合により遠くなつた学校に毎日通わなくても、家や統合前の学校、公民館などをを利用して授業が受けられたり、また曜日も選べたり、ただし参考した方がいい授業は皆で一堂に会し

て授業が受けられるような、そういうハイブリッド型の高校のカリキュラムが考えられてきてもいいのではないかと思います。

先日の県民新聞を見ても、どんどん子どもは減ってきています。中学までなんとか学びをつなげたとしても、高校に行って、特に商業、工業、農業、林業などの専門的なことを学ぶお子さんたちは20人とか30人の中だけの学びとなっていて、彼らが果たして未来に向かっていろいろな考えを巡らせたりすることが保障できる授業になっているのかと思うと、もっと学校を越えて横につながったり、そんなことも含めて小中の学びの先にもう少し夢が広がるような高校のカリキュラムが見える長野県にならないかと思います。

私が今おります松川村には高校がないので近隣の市町村に行くんですが、先日、池田工業高校が昔から取組んでいるデュアルスクールのことについて新聞に載っていました。そういうたった工業などを選んでいく子たちは、本当に高校の学びにかけて中学を卒業していきますので、少子化だから無理というのではなく、少子化だからこそ何か工夫した学びの形が新しく見つかるといいのではないかと今の高校の話を聞いて思いました。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。柳沢委員に振らせていただきますけれども、現状とニーズや必要性という点に関して、所感をお聞かせいただけたらと思います。

#### ○柳沢委員

野沢北の柳沢です。まずオンラインのお話ですけれども、コロナを境に非常に重要度が上がってきたと思っています。

本校も今年、インフルエンザ等で学級閉鎖になったりすることがあるんですけども、なった場合にはすぐ家でオンライン授業を受けられる形になっています。ほとんどの高校がそういう状況かと思います。それから、オンラインについては非常に県教育委員会に研究していただいている、やはり北海道が先進事例ということで、北海道の場合は面積が広い中で学校を減らすんじゃなくて、小規模になってしまって自分の家に近い学校に行けば、様々な学びがオンラインで受けられるシステムを配信センターで作ってやっていると。

このあたりは県も研究していただいている、今、長野県でもモデル事業という形でやっています。本校でも独自に北海道の視察に行って、これは特色化事業等で阿部知事さんに予算をつけていただいている、活用させていただいているありがとうございます。増やしていただけるとありがたいんですけども。

そんな形で北海道に行って、実際見てきました。小さな学校でも海外の学校と一緒に会議を行ったりだとか、高校生がそのような取組をしている事例もございました。非常に参考になるということで、長野県でも高校現場では比較的、オンライン授業の活用が進んでいくかなと思います。

それから先ほど高校入試の話があり、その通りだなという部分も多いんですけども、野沢北は佐久市なんですけれども、佐久地域では小中高の校長が一堂に会した会議を1年に何度か行っています。

そこで研修会等や講演会をやったりということで、小中高の校長連携ということを毎年やってるんですけども、そこで必ず出るのは、特に探究的な学びを国でも進めているし、あるいは長野県でも「探究県長野」を目指すということで、その方向性について進めていこうというものです。

野沢北は、県の「未来の学校構築事業」で、令和2年から探究的な学びを進めてきました。草本先生にもアドバイザーで毎年お世話になっていますが、5年間進めてきて、その事業は令和6年度で終わつたんすけれども、今は独自に三菱みらい育成財団やベイシア21世紀財団からご支援いただき、継続して自走を進めています。それを地域の集落や小学校の先生方もご承知なので、よく先生方に話してくれとか、生徒に探究的な学びについてやるということをとおして小中高連携があるんすが、その際必ず出てくるのは高校入試の問題です。

一生懸命探究的な学びをした子がいても、「高校入試ではやっぱり点数ですよね。そこがネックです。」ということは、義務の先生方にはよく言われるところです。本校の理数科は普通科よりも探究的な学びに取組んだ生徒たち、こんなこと頑張りましたという子たちにかなり来ていただいています。中学で探究的な学びや、こんな活動しましたというようなことを売り込んで来てくれる子たちが多く、理数科の生徒は良い意味で変わった面白い子たちがいっぱいいると感じています。それらを普通科や他校にも広げながら、研究的な学びを小中高つながってできればいいですよねということを校長間ではよく話をしています。

それから、大学との連携というのがすごく大事だと思っていて、村松先生にもいろいろお世話になっているんですけども、信州大学教育学部で全国に門戸を広げた地域枠、これ素晴らしい企画だなと思って、昨年、確か4名からスタートされたと思うんですけど、本校の生徒も出させていただいて、合格いただきました。今年もそういう形で合格した生徒もすでにいるんですけども、やはりそういう人たちは、高校在学中に探究的な学びや課題研究、あるいは外に出てのいろんな活動などに取組んだ子たちが非常に前向きに受験をしていくことがあります。

先日、県立大の金田一先生とお話をしたときに、金田一先生が「長野県の生徒たちは非常に真面目に一生懸命やります。だけど、これからはそこにプラスアルファが必要だ。外へ出て行って、いろんなことをやって感じて。そういうことが、いざその先に行った時にはすごく大事になってくる。真面目な長野県の子たちが大学で頑張るんだけれども、いざ勝負っていうところになると、県外の子たちにおいしいところを持っていかれちゃうということをよく感じる。」ということを言われました。自分でも聞いていて、そういうのもあるかもしれないなと思いつつ、今、うちの生徒たちに関しても探究的な学びを通じて中学校や小学校へ行く機会を増やしています。また、大学に行って学びたいというようなこともやりながら、やはり小中高大のつながりが大事だなと。

そうすると、高校入試においても点数であつたり、あるいは探究的な取組や姿勢のようなものを測ることがあってもいいかなと感じています。県境に近いところにあり、理数科がある学校なので、実は県外からの入学希望が毎年いくつか来ます。ただ、実際には長野県には住所がないこともある、しかし一方で他県では県外枠というものを作っていて、長野県の学生が県外には行ける状況があるというところも、県境に近い学校では非常に気にしているところであります。

高校入試については、私も現場にいる一人ですけれども、これから先に向けて、いろんな目でご意見を伺い議論しながら、これからの人々に合うものを考えていかなくてはいけないということは、現場で感じています。

### ○荒井座長

ありがとうございました。先ほどのいわゆるDXの観点や大学について、村松委員、所感をいただければと思います。

○村松委員

冒頭で竹内委員からお話しがありました、本当によく取組まれたな、素晴らしいなというのを感じました。また、三輪委員、柳沢委員のお話だと、私も高校再編に関わらせていただいていて、特色化とかいろいろな取組をなんとか進めたいということで、予算もぜひお願ひお願いできればと思っています。

今の柳沢委員のお話もありましたが、本学部で昨年から始めました総合選抜ですね、これは共通テストを課さないもので、スタート時は16名でしたが今年度は30名となり、1学年240名定員の1割を超えるました。やはり去年入ってきた学生たちは非常に意欲が高くて素晴らしいなど、まだ一年生ですが感じているところです。

そして、私たちの想定と少し違っていたなというのが、県外からの学生が結構いることです。「皆さんちゃんと長野県の先生になってくれるよね」というのは話しながらも、教職を目指す子たちにとって小中高の探究的な学びというものは私どもも評価しています。それらを作ることによって教職を魅力あるものにすると同時に、新しい学びを変えていければと思っています。

違った観点でよろしいでしょうか。②と資料2の⑤に関わいますが、部活動の地域移行についてです。

これは中高では非常に大きな課題だと思いますし、働き方改革の中でも、事務の効率化もさることながらいわば本丸の部分。ここを避けて通れないと思うわけです。私自身は専門が技術で、大学でもSTEAM教育など進めながら小中高とやってきたところですけども、中学校でもこれは考えなければいけない。

2つあって、1つは、運動系については結構進んでいるけども、例えば技術や美術などの文化系については非常に遅れている。それから都市部と中山間地で地域格差がものすごいと。県内では、例えば千曲市や坂城町など行政主導をやっているところがありますが、それは非常にレアケースで、全く手つかずのところも結構あります。

そこで私も今夏、中学校の技術系の部活動地域移行の法人を代表として立ち上げまして、信大工学部や高専、中学校の先生方に手伝っていただいて長野市でスタートし、下諏訪で今立ち上げの準備中ということで動き出したところであります。それを見て、想定以上に面白い生徒がいる、こんな子がいるのだということで、県でも「特異な才能のある児童」支援に取組んでいますが、驚いたところです。これを高校、大学、さらには企業とつないで人材育成という形で、中学校の部活という枠ではなく大きく捉えていくというのが1つ。

それからこういった「すごい子」だけではなく、「やることないけど、とりあえず何かやってみたい」といった、やや消極的な子も結構いるんですね。これは先生方のお話を聞いてみると、学校の中では文化系の部活動が、いわばそういう子たちの受け皿になっている。運動バリバリやるのではないし、特に何をやりたいという部分もなく、どちらかというと意欲が少ない。そういう子どもは結構いるのですが、そういう子たちを下支えする役目がある。それがなくなることの危機感をどうするのかということですね。

先日、東京都でその関係の会議があり、いろんな意見がある中でやはり、そういった状況も踏まえて部活動の地域移行は慎重にやるべきだという意見がありました。ただ、先生方のことを考えると、国からも言われる中で進めざるを得ない。その上でどのようにこうした受け皿の話や、特異な才能を活かす学びの機会を保障していくのか、地域格差をどのように埋めていくのかということは、ぜひ本格的に取組んでいただきたいと思います。

私もこのようにしばらくやっていて、例えば場所を借りるにしても、体育館とかは規定がありますが、それ以外の技術室を借りるための規定がそもそもない。そこからまず始めなくてはいけないとか、やってみてわかったことがたくさんありました。

教員以外の方の資格認定や研修どうしようとか、費用がかかるので、国も動いているのですけれども、そういう予算措置をどうしようとか、本当にいろいろ出てきています。ただ、子どもたちの多様な学びの保障、先々への産業等含めた人材育成のような様々な観点からも、これは学校教育のメインストリームではないにしても、進めなくてはいけないということがあります。

そういうものを重点取組でもお取組みいただければと思いますし、私もまた違った形で進めたいと思いますので、よろしくお願いします。

○荒井座長

ありがとうございました。近藤委員お願いします。

○近藤委員

今までの話と少し論点がずれるかもしれないですが、皆で探究学習をやっていきましょうという中で、制度が難しいと感じました。

ましてやその入り口である小学校低学年で、最近は学校に対するイメージがそれぞれ違う中で、学校のあり方をどう考えるのか。皆イメージが違うと思うのですが、人間関係づくりもしたいし、運動もしたいし、でも入り口のところくらいはせめて皆一緒にとなるけど難しいです。入り口の部分から変わらないといけないし、もちろん高校入試も変わらないといけない。入り口といつても、保育園ややまほいくと小学校では全然違う中で、どのように子どもたちの一人ひとりの多様性を認めていくかということを考えていかないと、いろんなことが全て手探りになってしまいます。

私は根本的に、この会議をまず未来から考えたい、学校そのものを変えていきたいと思っているんですけども、日本がこれまで積み重ねてきたものがあるので、変わっていくのはなかなか難しいと感じています。

結果的に見れば、明治の最初、先生が生徒を席につかせて勉強する。いろいろなことを言っているんですけど大きく見ればその流れになる。みんなが自分の考えを発言するというのがアメリカで、日本はそういうことは必要ないというように言うところがある。大学などはここまで話が出たように盛んに変わっていますが、入り口がもっと変わっていないかなというのが、市町村教委の代表としては思っています。

○荒井座長

ありがとうございました。残り時間わずかになってまいりまして、皆さん他にいかがでしょうか。草本委員お願いいたします。

○草本委員

ありがとうございます。私も皆さんと同意見で、信州学び円卓会議がでてからすごい勢いでいろいろな取組を進めていただいて、大変心強く嬉しく思っているところです。白馬村の小学校も TOCO-TON に手を挙げたそうなんんですけど、残念ながら選ばれなかつたということで、早くこの地図が真っ赤になるといいな思っているところです。

先ほどから入試の話や海外と日本の話など色々出ているのですが、最初に円卓会議ができた時には、私もそういうふうに思ってなかつたんですけど、今日いろんなお話を伺

って学びについて話すときに、AIの議論が出てこないことに違和感を持っているところです。

多分、1年ぐらい前までは、私もこういう席に座ってAIのことを話そうとか議論した方がいいとはきっと思わなかったと思うんですけども、今、社会が大きく変容してきている中で必要となるスキルが大きく変わっていると思います。狩猟時代は狩りが上手な人が生き残って、私は多分すぐに死んじゃったと思うんですけど、この部屋にいる人はみんな割と暗記も得意だし、与えられた課題を解くのが得意な人なのではないかと勝手に想像します。

そういった今の入試とかで測られるスキルの多くは、人間よりもAIの方が得意なことが多く、そのように世の中が劇的に変わろうとしているときに、例えば、私は英語ができるので翻訳が得意なんすけれども、私が30分かけてやっていた翻訳も今ではChatGPTなら2秒でできてしまう。私も正しいかどうかの判断ができるので、まだ多少は意味があるかもしれません、前のような強みではもうすでになくなっていると感じています。

私の息子は他県の高専でコンピューターサイエンスを勉強していて、設備屋か電気技師になればいいと思うよと言っていて、全然親の言うことは聞かないですが、先ほど柳沢先生がおっしゃっていたように、外に出て経験して、人との関わりの中で学ぶ力とか、協働する力とかがこれから圧倒的に重要になってくる中で、入試で測れるのは旧来の暗記力だったり、常に答えのある問い合わせ早く出せる人だったり、そういうふるいはもしかして意味なくなっているのかなと思いますが、今までそれで測ってきて教育が成功してきたから多分まだそのままなのかなという感じがしています。

長野県はすごく恵まれていて、これだけ自然もあり、昔から教育レベルが高いと言われてきていて、人間力のようなものを身につけるのにも適した環境が、県内そこらじゅうにあると思うんですよね。

そういった環境の強みとかを、今まで東京が一番教育のバラエティもあって独り勝ちのような感じだったと思いますが、先ほどからお話を出しているように、オンラインでその場にいなくても学べる時代になりました。

長野県は、白馬村もそうですけどコミュニティの力もとても強いと思いますし、そのコミュニティの中で自分がどう貢献するかとか、お互い協働をしながら自分の強みはないかとか、そういうことを学ぶのに本当にいい場所だなと思っています。白馬高校は全国から募集させていただいているので県外からいろいろな生徒さんが来てくれるんですけど、地域の人といろいろなことをやって、それが自信になってキラキラして卒業していく生徒たちをたくさん見てきています。そういうところを長野県として、AIの時代に必要とされる、磨くべきスキルとか教育などを皆で一緒に考えていくべきだと思います。

また、ここにいる人たちは多分デジタルネイティブな人がおらず、そういう人たちにも入ってもらって、もう私にも理解できないですが、今の若い人たちにとっては社会生活の切っても切れない大事な一部分がオンライン上にあるのではないかと思うので、彼らの意見や思いも聞きながら、より良い学びとか、本当に必要とされるスキルなどを考えていくべきだと思います。

### ○荒井座長

ありがとうございました。では近藤委員、お願いします。

○近藤委員

元教員だったものですから、やはり少子化の問題は大変大きいと感じています。

学校がかつて大規模だったころは、例えば体育の先生が4人ぐらい、音楽の先生が2、3人で技術科の先生も2人、家庭科の先生もいて、部活動を専門的にできる先生がいらしたんです。それが少子化で先生が少なくなってきた中で、今までと同じような部活動の方は当然無理なわけです。

それは変わっていかなければいけないのですが、なかなかそこが理解していただけない状況で、こういう会議でやっていただけて応援することで、学校の中の機運が変わってくる。指導員の先生が少なくなってきた状況も含めて、今まで学校に全てやってもらつたことが、この会議によって「みんなで担おうよ」という形になってきていることは大変いいことだと思います。

学校だけで担ってきたことを、自分たちがどうやって行くか、高校入試もその関係になってくるかと思いますが、ぜひそういう議論になってくるといいなと思います。

○荒井座長

ありがとうございました。竹内委員、お願いします。

○竹内委員

今の近藤先生や柳沢先生の話もつながるんですが、中山間地の町の教育長という立場で最後に一言だけ、先ほど柳沢先生がおっしゃったように、小中高の12年間の学びとその後の学びの連続性や、義務教育から高校までの地域における一体感というの、特に中山間地にとってはとても大事なことです。

具体的には、山ノ内町の周辺には飯山高校や中野市の2校、そして下高井農林があるんですが、本当に地域の人からの期待感が非常に大きいです。やはり残していくかなければいけないし、残ってほしいというモチベーションも極めて高いですし、私が言うのもあれですけれども、地元の役場に勤めている方、地域を支えている方はその卒業生が多いというのも現実です。

そこで申し上げたいのは、県立高校は県と市町村という役割の違いがどうしてもあるんですが、やはり中山間地の高校においては、地元の市町村ももっと責任や、ある意味覚悟を持ってその県立高校を支えることに関われる仕組み。例えば県と地元の市町村の共同設置とまではいかずとも、県立高校は今、再編議論どんどん進んでいますが、地域から高校がなくなると確実にその地域は衰退していくと思いますし、そうなる前に地元の市町村が県立高校へ責任をもってコミットできるような仕組みもぜひ検討していただけたらと思いますし、私としてもできるなら検討していきたいと思います。

○荒井座長

ありがとうございました。終了時間が迫ってまいりましたので、教育長および知事からもコメントいただけたらと思います。本日、入試や高校におけるオンライン授業、さらには、部活動の地域移行、AIの議論などの論点がありました。

重点取組項目を設けたものの議論できていなかった部分があったことは、座長として改めてお詫び申し上げたいと思います。

高校入試に関しては、何のために高校入試を行うのかという本質に立ち返る必要があると思います。

選抜の手段としてという部分があるものの、子どもの学習権を保障していくという前提を共有しつつ、少なくとも入試の公平性、透明性、信頼性を確保する仕組みを構築していかなくてはなりません。もちろんそこでは現場の負担感に対して考慮する必要もあります。

先ほど竹内委員からは学力調査の廃止という提案をいただきましたが、入試制度はかなり複雑です。例えば、学力検査、調査書、多様な学び等で選抜方法におけるバランスをどのように取るのか、あるいは、取らないのか。あえて学力調査一本で画一化することで、能力を厳格に捉えるという方法もあれば、様々な方法を組み合わせてハイブリッド型のものを設計する考え方もあると思います。入試制度については、特定のニーズを踏まえた枠を別立てて増やすのか、枠は既存の1つを維持しながらその中の選抜基準の軸を増やすのかなど、様々な論点が考えられます。

2つ目の高校のオンライン授業に関しては、どこが主体となるのかが第一義的に重要です。またどのような場合に利用可能か、単位制等の関係も踏まえて検討をしていく必要があると思います。

部活動地域移行に関しても、過去や現在をそのまま再現していくことは難しいと思いますので、新たな学びの在り方を機会保障とともに考えていく必要があります。

他にも様々な論点を提起いただきありがとうございました。次年度以降の取組に活かしていきたいと思います。それでは、オブザーバーのお二人にコメントをいただけたらと思います。

では、武田教育長からお願ひできればと思います。

#### ○武田教育長

高校入試の話をありがとうございました。県教育委員会は学校と似たようなところがあつて、できないことをできないとはつきり言ってこなかった。そういうものの積み重ねもあるだろうかと思いました。

例えば議論の中で、点数だけで高校が決まると県民の方が思っているんだろうなと。現実には点数だけではなく、いわゆる相関図で決まっているわけです。先日も「高校を序列化している」と言わされました。高校を責めているけど、高校は何点以上でないと入れませんとは言っていないわけです。

今まで入試制度について県教育委員会はあまりオープンに議論してこなかったので、先ほど竹内教育長がおっしゃった長野県方式というように、皆で議論をして本音で考えていく。県教育委員会も言い訳をするのではなく、こういったことをどう考えるんですか、と問題提供していくことだと思います。

例えば面接で決めるときに、「なんでうちの子が落ちたんだ」と言われた時には説明できない、そうすると点数の方がはつきりするじゃないかという議論も一方にあるわけで、そういうことを腹を割って皆で話していくことが大事だと思ったところです。

それからオンライン授業については、山間の小規模校の教育力をいかに維持していくかというときにオンライン授業は欠かせないアイテムなので、これについては強く進めていきたいと思います。

それからもう1つ、私の個人的な意見ですが、村松先生と全く同じことを感じていて、私も中学校の現場にいたときに運動が得意な子たちは部活で頑張るんだけど、目立たなかったり、少し友達も少なかったような子が文化系の部活動で何とか位置づいていたということがありました。だから地域展開はスポーツの方はかなり進んでいますが、文化系の部活動をどのようにしていくかということは、地域に居場所をつくるという議

論と一緒によく考えていかないといけないんじゃないとかと、今、県教委でも問題意識を持っているところです。

○荒井座長

ありがとうございました。知事、お願ひいたします。

○阿部知事

私の今の頭の中にあるのは、高校無償化と給食無償化。3党から全国知事会にボールを投げられているので、明日、知事会で意見集約して回答しなければいけないということではほぼ頭がいっぱいな状況ですが、まずは、この円卓会議と教育委員会の皆さん、ここまで様々なご意見をいただきて進めてきていただけたことに感謝申し上げたいと思います。

入試の話ですが、私は円卓会議の中では最も教育に直接的に関わっていないので、私が一番離れたところから教育のことを見ていると思いますが、入試の問題は、そもそも学校は何のためにあるのかということに立ち返って考えるべき。「勉強って何のためにするの」ということを考え直さないといけない時代になると思います。

先ほど、草本さんがAI時代の話をされていて、私も白馬フォーラムに呼ばれてだいぶ刺激を受けていますが、私も日々の仕事の中でAIをバンバン使っています。おそらく普通の事務をやる人間は徐々に必要なくなるというの、確実だと思います。

例えば、大工や看護師など人間でないとできないということをできる人が求められる中で、今の入試制度はそういう能力とは幾分違うところを評価軸にしています。これは私の個人的な意見ですが、これから20年後、30年後の社会に必要な人材を育てるという視点が欠落しているのではないかと思います。

現在、大学の学部、特に私立は文系に偏っているということもあって、理系人材を増やすために変えていくということを文科省も取組を始めていますが、やはり学びの面としては、そうした社会の動きを先取りしていかないと、いつも文科省が動いたら何かやりますという発想では県民の期待に応えられないのではないかというのが、選挙で選ばれている私の問題意識であります。

そういった、そもそも学校は何のためにあるかということを問い合わせ直す必要がある。学校の成績についても、今は何でも序列化していますが、本当に社会にとって必要な部分までできれば100点とか、A評価にするとかして、あとは個性とか特色ととらえていかないと、それこそすごく飛び抜けた子どもたちもいる中で、なかなかそういうことが一緒にやれないと思います。

1つの評価軸以外で見れば、それこそ非認知能力ですごく人に優しい子や、すごく動物が好きな子とかでも、学校で点数つけられることによって嫌いになるんです。私も正直ずいぶん嫌いになりました。学校で「君は体育苦手だね」とか言われて。でも生きてくには何も支障もないし、スポーツも楽しもうと思えば楽しめますが、嫌いにさせられていることが結構多いのではないかと思います。その意味では、そもそも学校は何のためにあるのかということを考える延長で、入試のあり方を考えなければいけないと思っています。

今回、文科省が専門高校に対する基金を設置して支援をするという方向性を出してもらっていることは大変良いことだと思いますが、それだけで本当にいいかというと、まだ今の枠組みの中での充実や特色化にとどまっているので、もっと社会全体の中

での学校の位置づけをどうするかということをもう一度皆さんと一緒に考える必要があるのではないかと思います。

また、授業が得意な教員はオンラインやビデオで授業を行って、あの先生は個別指導をやるとか。さらには、学校に行きたくない子どもたちも含め、皆で様々なことをメタバースの世界で学べるようにするとか。やはり集団行動も必要なので、それはそれで別に考えるとか。今までの学校のあり方というのを根底から考え直さないと、おそらくAI時代に適応した教育にはほぼ確実にならないと私は思いますので、そういう観点で検討いただかなければいけないと思います。以上です。

○荒井座長

ありがとうございます。それでは次第5「ともつくフォーラムの開催について」、事務局から説明をお願いいたします。

## 5 ともつくフォーラムの開催について

○矢島補佐

「ともつくフォーラム」の開催について、事務局からご説明いたします。資料5

「「信州学び円卓会議 ともつくフォーラム」の開催について」をご覧ください。

開催日時は 令和8年2月4日(水)13時から17時30分まで、会場は松本市の信毎メディアガーデンホールでございます。参加者は、児童生徒や学生、教育や学びに関する関係者・団体、信州学び円卓会議委員、一般参加者を含め約80名を予定しています。目的や内容は記載の通りでございます。

ともつくフォーラムは、学びの未来を共に創る場として、多くの方にご参加いただき、実践を共有しながら、学びの「新しい当たり前」を共に創って行く場になればと思います。簡単ではございますが、事務局からの説明は以上になります。

○荒井座長

ありがとうございます。年明けの2月4日に実施をすることになっております。皆さんにもまたお声がけしたいと思いますし、すでに万博のような形で出展を募集し、エントリーがあります。今打ち合わせをしているところですので、ぜひ足を運んでいただけたらと思います。

それでは恒例となっておりますが、本日も「先生の幸せ研究所」の田上誠悟さんにグラフィックコーディングをお願いしておりますので、よろしくお願ひいたします。

○田上氏

17時過ぎてるので、最初を省略し途中から始まる形にしています。

2025年12月10日第6回信州学び円卓会議です。

ともつくミーティング、これまで何度も開催した中、そして今日は重点取組項目、この内容について話を深めていきました。実際の皆さんのお意見のところを抜粋して振り返っていただけたらと思います。

今日は入試についての話、そしてオンラインの授業の話等が進んでいきました。最後の話にもありましたけれど、何のためにこれを行っていくのか、そして学校のあり方、今進んでいるTOCO-TONの話はそこの心臓部かと思います。いろんな方々で話し合いながら、不登校だった子が再スタートできるように、そんな観点もありましたし、教育支

援センターが何を目指していくのかいろんなところで目的を問い合わせながらどんな学びに向かうか、というこの信州学び円卓会議の軸になるところをずっと深掘っていった時間だったかと思います。

高校でのオンライン活用の話もありました。部活動の地域移行とも絡んでくるところですが少子化の中、人口減の中、リソースが限られるところで、一方でともつくミーティングでもあった「つなげる・支える・広げる」を、いろんな社会の変容をしたオンラインやAIを使いながら広げていくことができるんじやないか。

一方で、AIの時代だからこそ磨くスキルもあれば、AIに代替できないものがこの信州にはたくさんあるかと思います。人のつながりや自然、居場所も含めて、そういうものを大事にしながら、この価値を、連携をしながらこれからも進めていく。そんな今日の2時間のお話でした。ありがとうございました。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。本日はこれにて終了したいと思っております。

進捗状況をご確認いただきご意見いただいた点に関しましては、具体的な実行フェーズに移っていますので、ともつくミーティング等々を活用しながら、県民の皆さんと対話を続けていきたいと思っております。

では事務局に戻します。

### 6 閉会

#### ○内山課長

皆様、本日は長時間に渡りありがとうございました。

以上をもちまして、本日の会議を終了させていただきます。

(了)